『静春堂詩集』について

要木純一

筆者は、中国近世の文学、芸術史において量的にも質的にもその存在を顕著にする、いわゆる「文人」について、全般的な研究を志すものであるが、目下その発生の時期について考えあぐねているところである。

ひとまずは、普通の文学史に書かれるように、元後期に文人が発生したとするのが妥当だと考える。例えば、吉川幸次郎『元明詩概説』（一九六三、岩波書店）一〇三頁。「第三節　文人の発生　倪瓚、顧瑛　高明」

楊維楨の文学、またその生活は、文学を至上とし、芸術を至上として生きる態度である。芸術を至上とするゆえに、その生活も、芸術家としての特権を主張し、常識にこだわらない。こうした態度の人物を、この時期以後の語で、「文人」と呼ぶ。従来の中国の文明が必ずしももった人物ではない。……楊維楨、ないしは楊維楨を中心とする元末南方の「文人」たちの態度は、……哲学と無縁であり、政治とも無縁である。あるいは政治とは無縁であらざるを得ない環境にいる。

ここに見える「文人」の過不足ない定義に筆者も従うが、その大量の発生は元末南方であるにせよ、その精神の発生を今すこし時代をさかのぼって、量的には少数であるが南宋末元初の隠逸詩人達のなかに探ってみたいのである。

中国文明は、他文明と比べれば、断絶のない文明であり、文献も多量に残っているので、「文人」の典型を求めようとすれば、何百年をさかのぼることも可能かも知れない。「文人」とて、人間の精神のありようの一部が拡大したのであり、新人類が発生したのではないからである。その危険を承知の上で、筆者は「文人」のある程度の地歩が南宋末・元初に固められたと考える。「文人」の定義から当然のことであるが、彼等は政治的に突出していない。だか

ら、文天祥や謝翺、鄭思肖の如く、元に抵抗した詩人として、文学史上に取り上げられることは少ない。しかし、小詩人であり、特異なタイプではなく、時代の波に流されるような彼等の作品にこそ、次代につながる精神が見られるのである。

本稿では、南宋末に生まれ、青年期に王朝の交代を経験し、新王朝には極端な抵抗を示さず、短い時期ながら仕官もしたが、多くは政治を避けて隠逸的な生涯をおくった、袁易を、その詩集『静春堂詩集』を材料として論ずる。筆者は、彼を「文人」の典型と考えるが、何分にも一人だけを扱うので性急に結論を急がず、多角的に彼の文学のありように考察を加えたいと考える。

袁易（一二六二～一三〇六）の四十余年の生涯については、元中期に活躍した学者にして政治家の黄溍（一二七七～一三五七）の撰した「袁通甫墓誌銘」（四部叢刊本『金華黄先生文集』巻三三、また後述の知不足斎叢書本『静春堂詩集』序に「故静春先生袁君墓誌銘并序」として附す）が詳しいので引用をまじえて説明する。

「呉の隠君子に曰く、袁君、諱は易、字は通甫」「隠君子」出仕しない知識人として目されていた。「其の先は宋初に当りて、進士より起ちて京朝官と為る者有り、仲賢と曰う。始めて汴に家す。仲賢の後、京西提刑珣と曰う。君に于いて五世の祖と為す。南渡の時卒し、呉に葬らる。因りて焉に家す。故に今は平江の人と為す」先祖は北宋の官であったのが、金に征服された時、今の蘇州に逃げて定住した。「曽大父は璡と曰う。其の地の衍沃なるを楽しみ、長洲の蛟龍浦に田を買い室を築き、躬ら耕して食い、布衣を以て終わる。大父は祐之と曰う。承節郎監廬州都税務たり。父は枢と曰う。国史実録院検閲文字たり。皆仕えて未だ顕れず」南宋に入ってから父の代までは、無官または微官であった。

さて、易も仕官を望まなかったという。「君に至りて復た仕進を楽わず」元の科挙廃止で知識人の栄達の機会がうばわれたことが、文化史ではよく強調されるが、彼の場合、性癖による部分が多いように思う。「東平の徐公は部使

者の節を持す」江南の人士と交流が多かった徐琰のことと思われる。元史巻一九〇によれば、至元二十八年（一二九一）江浙参政に除せられ、三十一年（一二九四）浙西廉訪使に遷り、大徳二年（一二九八）入りて翰林学士承旨と為った。後述の袁易の杭州行はこの間のことであろうか。「君の名を聞きて延見し、与に語りて大いに悦ぶ。将に之を朝に薦めんとするも、君は力めて謝して可かず。徐公は益す之を賢とす」このように出仕を断ったのだが、ひとたび書院の長に召かれる。「已にして行中書省君を石洞山長に署す。君乃ち欣然として往きて職に就く」しかしすぐにやめて庭園を営んで悠々自適の日々を送るのだった。「既にして帰り卒いに隠す。居る所の西偏に即きて堂と為し、静春と曰う。水を壅（ふさ）いで池と成し、四隅に周らす。池上は石を累ぬること山の如く、芰、荷、蒲、葦、竹、梅、松、桂、蘭、菊、香草の属、敷舒繚繞し、而して其の外は則ち江を左にし湖を右にし、禽魚は煙波莽蒼の間に飛泳す」日々の営みは校書と朋友との談話に費された。「堂中に書万巻有り。悉く君の手ずから校定する所なり。客至れば輒ち巻を斂め、与に縦飲劇談す。留連日を竟えて乃ち已む」好天には舟を浮べて高歌し俗世を超越した人と認められた。「君は丰姿秀朗、風止まり雨収まる毎に小舟を挾みて、筆床、茶竈、古玩器を以て自ら随え、逍遙容与して、舷を叩きて歌う。之を望む者は、其の世外の人為（た）るを識る」そして彼の学問の優れた点を説く。「君少くして学に敏なり。蘊積の素、一に詩に発す。未だ始めより性命を高談し、師道を以て自ら任ぜず。其の石洞に在るに至りては、双峯の説を推明し、上は考亭（朱熹）に及ぶ。皆諸生の昔より未だ聞かざる所にして、焉に敬服せざる莫し」双峯は饒魯、徽州石洞書院を立てた。袁易はその長となったのである。要するに、南宋の朱子学の素養が深かったことをいうが、それを背景に、彼の才能は詩作により多く発揮される。「君の為す所の詩『静春堂詩集』八巻有り。龔氏子敬之が序を為し、半山に近しと謂う。而して漁陽の鮮于公は、其の閑遠清麗なること、稍や精密を加うれば、少陵到るに難からずと称す。（この部分後述）其の一時の名人の為に推量せらるること此くの如し」旧南宋の文学者の中心であり、元に仕えて大官となった趙孟頫からも認められた。「呉興の趙公は、嘗て汝南先賢伝の記す所の漢司徒袁公臥雪の事を取りて、写して図と為して以て君に遺る。且つ曰く、予此の図を為すは、正に通甫修むるを好むの士たるを以て、之をして其の高節を景慕せ使めん爾。則ち君の人品固より問わずして知る可し」二十四孝の内の袁公臥雪の故事を取っ

て、恐らくユーモアまじりで送られた書画は、袁の子孫と知りあった明の呉寛に目睹せられたという。（知不足斎叢書本『静春堂詩集』呉寛の跋「是の図は数年前、予は南都に在りて実に之を見る。今何処に流落したるかを知らず。惜しい哉、此の巻と与に並びに袁氏に蔵せられざりしこと」）

以下は袁易の家族について。「君が母は趙氏。濮安懿王八世の孫女。妻は奚氏。子は男四人。長は震と曰い、次は泰と曰い、次は晋と曰う。皆張の出。次は驄と曰う。陳の出。泰は文学を以て克く世つぐ。其の家女は五人。長は金大声に許適するも、未だ行かずして卒す。次は顧天隣仲振の孫、顧正許徳明に適ぐ。孫は男三人、女三人、倶に幼し。君の卒するは、大徳十年（一三〇六）十一月二十六日。寿を得ること四十有五。其の年は十二月二十四日。長洲東呉郷赭墩先墓の次に葬らる。後二十有八年、是元統二年（一三三四）と為す。君の子震は已に卒す。泰及び晋始めて石を伐り、状を以て来りて文を謁す。為に其の銘を銘して曰く、之に居ること熙熙、之に行くこと施施。世我を遺つるに非ず、我為さざる有り。寤めて言に之を歌えば、其の声たる也希なり。昭昭として其れ垂れよ、表して以て辞を刻す」

妻の奚氏（一二六三～一三六四）は、文淵閣四庫全書本『王忠文公集』巻二十四所収「袁母奚夫人墓誌銘」によれば、十八で袁易に嫁し、袁の死後四十年に渡って家を守り続けた賢夫人である。その墓誌銘に「吾（袁泰）が母の幼き也、即ち令淑を以て聞こゆ。親の鍾愛する所と為る。壻を縉紳の家に択ぶ。我が先君早に文行を以て名を知らる。遂に以て焉に帰す」とあるのを信ずれば、袁家はかなりの名家で、袁易も将来を嘱望されていたのであろう。息子の袁泰は文学で名を成し、かくて袁易の遺した『静春堂詩集』も名士達の序跋や評を得ることが出来て、後世に伝えられたのである。黄溍の末尾の銘は、袁易が進んで隠逸の士となったことを示している。だが、その微妙な処世観については、今少し探究をしなくてはならないだろう。

『静春堂詩集』のテキストについて、簡単に紹介する。筆者が利用したのは、

㈠　清鮑廷博輯『知不足斎叢書』第二十八集所収『静春堂詩集四巻坿紅蕙山房吟稾一巻』

㈡　文淵閣四庫全書本『静春堂詩集』四巻

㈠は袁易の子孫で、清代の学者、袁廷檮の別集を附している。㈠も㈡も四巻で、黄溍の墓誌銘にいう「八巻」に合わない。現存のテキスト所収の詩が、必ずしも彼の全生涯をおおっていないような、尻切トンボのような印象を与えるところから、抄写の過程で多くが失われたであろうことは想像に難くない。異民族の支配下、意図的な刪除が行われた可能性は否定できないが、筆者のみるところ、元代の検閲は後代のものほど厳しくはなく、また袁易は抵抗詩人などではないことは明白で、単に偶然にテキストが失われたと見なしてよいように思われる。また、現存のテキストから十分に袁易の全体像が浮かび上がると信じる。

さて、㈠と㈡の間に本文の出入は殆んどないが、序跋の部分が違う。㈠の序跋は恐らく諸書から輯めて附したものが大部分を占めると思われる。その校訂はほぼ信頼するに足り、便利であるので、㈠を底本として用い、必要に応じて㈡で補うことにする。

袁易の作品から、彼の先駆的な文人性を読みとる作業に入るが、その前に詩の解釈の重層性に関する筆者の見解を述べる。

例えば、『静春堂詩集』（以下『詩集』と略す）巻二「重午客中雨三首」の第一首第三聯

「竹葉は人に於いて緑に、榴花は此の日紅なり」

を、いかに詩として解釈するか。旅の不安な心情、ことさらに竹や花の色彩が目にまぶしいある感情――現代の我々も時に持つような――を託した風景の描写という心理的な解釈がまず一つ。時代の激変に対して、自然が循環しつつも不変であることの不思議さを表出したという歴史の観点からの解釈が今一つ。その歴史的解釈についても、異民族統治下における亡国の悲哀等の反元朝の民族主義を読みとることも可能であろうし、元に同調し期待を寄せながらも自らが仕官できないかも知れないというような、王朝の変遷にかかわらぬ知識人の不安を読んでもよいであろう。或いは単純に自然が美しいという面白くない解釈も許される。しかし、詩は、そもそも一つの解釈しか許さないもので

はなく、作者の方も散文では言い切れない複合重層的な感情を句に託しており、読者の問題意識に応じてある程度の解釈のゆれが許される、或いは、読者の解釈のゆれの幅ほどの広がりを持った感情を作者はもともと有しているのだと筆者は考える。かかる詩という形式が持つ特殊性から、筆者が戦略的に（我田引水的に）、筆者の問題意識＝袁易の文人性に引きつけて解釈するのをしばらく許して欲しい。

かくして、筆者は、袁易の詩を、文人的な芸術至上主義に偏って解釈する。といっても芸術のみを目的としていると言っているのではない。先に引いた一聯の背景には、旅の不安もあろう、新王朝に対する不満や、おそれや、反発もあろう、ただそれらの感情が深ければ深いほど、「竹の葉が緑で、石榴の花がひときわ赤い」あたりまえのことが与える感動＝芸術的快楽はより大きくなるのである。

『詩集』巻一の「泰伯廟を過ぐ」の詩。一見呉の泰伯に託して、漢民族・江南ナショナリズムの再起を期するが如くである。

「伯や諒に霊有らば、願わくは言に頽靡を振わん」

しかし、彼がより深く心を動かされたのは泰伯廟の寒々とした景色と江南の停滞したムードかも知れない。この句の一つ前の句。

「神孫すら且つ淪薄、流俗重ねて已んぬるかな矣」

荒廃した遺跡の美に魅かれる、退廃的な部分が彼には確実にある。巻一「蘇子美の滄浪故園に遊ぶ」その廃園の不気味さ。

「蘇侯故台の沼、蕪没今誰か記せん。依依として故址存す、惨惨として廻飆厲し。谷は伝う魑魅の嘯き、地は失う神霊の衛り」

巻三「春日廃園に遊ぶ」荒廃の纖細な美。

「垂楊水に臥し傲傲として舞い、細草階を侵し故故として生ず」

無論、宋以後の作者の常として、悲哀の止揚を一応は目指す。巻四「公事に因りて駅中に留まり、遂に姑蘇台に登

る。晩望」

「娃館今は荒草、呉宮は祇だに廃丘。図を按ずれば旧跡に非ず、古えを訪ぬるも深く愁うる莫れ」

地図を調べれば、目前の荒廃した遺跡は、真の呉代のものではないのだから悲しむな。しかし、これは悲哀の止揚であろうか。むしろ悲哀をもてあそぶ快楽を筆者は感ずる。

悲哀からの逃避として、仏教へ気持が向かう。ただそれも真の信仰ではなくて、観念の遊びに過ぎない。巻一「霊巖に遊ぶ」

「秦宮は蔓草に委し、漢闕は寒螢流る。惟だ応に金仙の姿、空山に屹すること亭亭。摩足八極に燿き、象教は千齢に垂んとす」

中国文明独自の巨大建築物は破壊され、却って印度由来の仏教建築が残ることに興趣を覚えるだけの観念上の遊戯。同じく巻一「開元寺閣に登りて浮海石仏を観る」

「危坐隋唐を睨み、浩刦は一朝夕。檻前に飛鳥は逝き、戸外に流水は疾し」

要するに石仏が残ったのだから仏教は尊いという単純な論理であり、仏像に対するひたむきな崇拝を詠むというよりも、むしろ、「飛鳥」や「流水」等の自然の変転の速さを、不変なる仏像に対比する、芸術的表現上の妙に興味を覚えているようである。他の仏教関係の詩も、僧に対するあいさつ以上に出ない。

以上引いた詩は亡国の哀しみが背景にあるとも考えられようが、それよりは芸術的感動に作者の主眼が置かれているのではないか。そこに筆者は袁易の文人性＝芸術至上主義を見るのである。

南宋政権の威信が低かったためか、どうも、宋末元初の詩人は一部の抵抗詩人を除いて、反元の気迫が弱いように思うのは筆者のひがめであろうか。現代の我々が想像するように四六時中モンゴルの圧迫感を受けていたわけではなさそうである。むしろ、時代が安定すると、仕官の望みを抱くのが大勢だったようだ。『詩集』の明代呉訥の跋にいう。

「元氏初め江南に克つに、畸人逸士は里閭の間に浮沈し、詩酒を以て玩世する者衆し。元貞・大徳の後に迨びて、稍や出でて儒曩に居し、以て後進に淑す。静春と子敬（龔璛）、重鼎（銭徳鈞）、彌昌（湯師言）の若きは是なり」

『詩集』中、杭州、銭唐に旅した時の作品が多数あるが、行中書省に対する一種の猟官運動であった可能性が強い。『中国文学通史系列・元代文学史』（鄧紹基主編。人民文学出版社、一九九一年）にいう。

「「杭州道中書懐」「重午客中」と「呉中の諸友に寄す」（いずれも巻二）……「君が懐は屣を捨つるに同じく、吾が道は絲の如きを嘆く」（湯師言）「即い呉詠に同じからんと擬するも、焉んぞ知らん楚囚に效うとは」（趙明仲）と「君に煩わす席を割つこと毋きを、漂転して暫し埃塵」（銭徳鈞）。這は是れ当時の一位の漢族の士子、出仕するを願わざる由り出仕するに到り、最終に却って又重用せ被れざるを感到して而して発出するの感嘆なり」

確かにここに挙げられた詩は、出仕できない自己や友人の不遇を嘆く気持が背景にありそうだ。しかし、語弊を恐れずにいえば、その嘆きに溺れる快楽もあったのではないか。

袁易の場合は、古典の典故を借りることによって、その嘆きの感情をより増幅せんと意図しているかのようである。杜甫等の場合と同様であるが、筆者の見る所、安易に典故を多用し、典故の醸し出す既成のイメージによりかかりすぎている。巻一「潘鶴臞の帰りて母に侍うるを送る」

「子は何ぞ意浩蕩、帰心奮飛の如し。王粲故郷の志し、江淹南浦の悲しみ。丈夫各の適く有り、聚散焉んぞ期す可けんや」

王粲、江淹の故事を、何ら加工をすることなく用いる。その安易さは、すぐ二首後の「王沂父常州学正を送る」に「江淹南浦の情」とここと一字のみ変えて句を作っていることに如実にあらわれる。応酬の作で苦吟するに値しなかったにしても、集にすればあまりにあらわである。

袁易は、王粲の登楼賦の故事がいたく気に入っているようで、『詩集』巻一「杭州客楼開爐の日の作」に「千古流伝す王粲の賦、人をして登覧して愁端を動ぜ令む」巻二「孔退之に寄す」に「遙かに青山に対して風度を憶う、幾回か独り倚る仲宣の楼」とある。

元雑劇に「王粲登楼」（鄭徳輝作、『元曲選』所収）という曲がある。書生たる王粲がひとり楼にのぼって不遇を絶唱するのが山場であるが、喜劇仕立てであるにせよ、なぜかかる劇が受容せられるのか、筆者には不審であった。しかし、袁易のように、古典、故事に依存して、書生の孤独な不遇の嘆きを繰り返し描写し、味わうのが、江南の文人の気風であったとするならば、鄭徳輝が杭州で活躍したらしいのと相俟って納得しやすいのではないだろうか。

袁易の作品における「亡国の恨み」や「書生の不遇の嘆き」の裏に、芸術性を至上とする文人性を見てきたが、筆者は何も袁易の作風が欺瞞に満ちているというのではない。先述したように、詩は重層的に見なくてはならない。袁易の詩は、高い精神性、孤高な求道精神に裏打されている。このことも文人の発生と関連して述べたい。

文人の大量発生を支えるのは、経済の発達である。この点からも、元の征服による江南経済の打撃のみを強調するのは誤りで、世界的な流通システムが成立した恩恵を忘れてはならない。経済の発達に伴って、当然都市も質的、量的に拡大する。文人はいわば巨大な都市（蘇州、杭州、松江）に寄生して増殖するのである。それにもかかわらず、かく恩恵を受けながら、文人はその発生の当初から都市に対する憎しみ或いは不快感を抱いた。あたかも、現代人の科学技術文明に対するアンビバレンツと一般である。

文人の活動や交流の場は主に都市にあったが、都市を意図的に避けて、郊外や田園に場を求める一群も存在した。中国伝統の隠逸思想が彼等の思想の支えとなったであろうが、彼等の心情の中心は、新たに出現した近世都市（経済）に対する憎悪であり、その憎悪を細かに分析すれば、それにもかかわらず自らの存在を支持する都市を完全に否定することが出来ない苛立ちの感覚が更に加わる。このような複雑な影を帯びることが、彼等の思想の伝統的隠逸思想と異なる所である。

袁易もこのタイプである。彼の詩に見える都市との距離を、まさにその都市を表わす中国語の「城」をキーワードにして読み取っていきたい。

『詩集』陸文圭の序にいう。

「具区甫里の間に、隠君子袁易通甫の家有り焉。廬を結び亭を構えて、蒼茫の外に出づ。樵村漁舎、混じて一区と為す。城市の跡は疎にして而して麋鹿の性は馴なり。嗜欲の機は浅にして而して鷗鳥の情は親なり。交わる所は皆畸人逸士、西隣北里、詩筒往来す。清江白月には、樽を挙げて相属す。優游して仕えざる者四十餘年」

袁易と直接会っていないが、（「余恨むらくは静春の堂に登りて相与に其の議論を上下せず」）同時代人だけに、都会に対する嫌悪の感情を共有する。城市の影響は出来るだけ少なくなければならなかった。なぜならその高度な経済力が欲望を刺激して人を狂わせてしまうからである。

袁易の詩における「城」の用例を見よう。

「今君は城郭に在り、竹を種え下蹊を成す。比隣来往するに任せ、藩籬を捶た遣めず。我自ら家法を用いる、此の意人知るを得ん」（巻一「贈竹逕」）

「江天物色人の共にする無し、城郭の風塵我を奈何せん」（巻二「首夏村居雑興七絶」第六首）

「故人城郭に尚お留連す、何れの時か共に鼓たん呉淞の柁を」（巻二「八月一日雨後賦す、兼ねて城中の諸友に寄す」）

「暫し憇いて城郭を忘れ、長く謡いて澗阿を詠ず」（巻二「正月十六日、徳鈞、子敬、翼之泊び児子震と束季博山園に遊ぶ、詩五首を賦す」第一首）

「城郭の塵埃馬に傍りて飛ぶ、此の中何の地なりてか頓みに能く奇たる」（巻三「杭自り呉に還る。徳鈞を訪ぬ。因りて留めて文を論じ、午を過ぎて帰る。途に竹間の道院を過ぐ」第一首）

「城郭に駆馳して還た知るや否や、江水桃花昨夜の風」（巻四「陸冶僊に寄す」）

「城郭風塵」「忘城郭」「城郭塵埃」と都市を否定的なイメージでとらえ、自らが住む田園を最高の境遇と考えて、都市の居住者に対して誇りつつ、彼等を誘引するのである。

「窗には含む遠嶺綿綿たる樹、門には対す清江箇箇の船。此の景は吾が廬に朝莫有り、画中忽ち見れば絶だ憐むに堪えたり」（巻三「銭翼之所蔵の華岳山水図に題す」）

杜甫の絶句を換骨奪胎したこの詩は、絵をほめるようでありながら、実はわが家のすばらしさを絵によって再発見

して、誇る気持がすけて見えないか。

しかし、ある対象に嫌悪を示すことは、同時に、その対象が持つ圧倒的な迫力に抵抗しようとするあがきであり、また自らがその対象への依存から脱却できない歯痒さである。「城郭に在る」人に対して、「我自ら家法を用いる」とやせがまんをせねばならず、「城郭の風塵我を奈何せん」と抵抗せねばならず、「城郭に留連する」友達に早くここに来てくれと呼びかけなくてはならないのである。

都市の享楽的な生活、楽しい交友を知ったものは、それから脱却するのはむずかしい。かくして、後世の文人達の一派は、都市を嫌悪しつつ、都市を絶対否定するのではなく、適当な距離をおこうとする。袁易が生きた時代は、文人の萠芽期であればこそ、後世の文人にとってはあたりまえすぎて、却って読者にはわかりにくくなっている、上の如き事情があからさまに詩句に表出しているのだと、筆者は考えている。実際の生活にとってはともかく、芸術的な生活にとっては、前代の士大夫と違って、王朝の興亡や書生の不遇よりも、この都市の発達という新状況がまず文人達の関心事だったのではないか。

都市を離れて、孤高を保って、芸術性を守る。――上述のごとく、言うは易いが行うは難いこの方針を袁易はいかにして貫いたか。

それは少数の同志とグループを作って相い励むことであった。あたかも、仏教徒が世俗を超脱した孤高な道を求めながら、絶対孤独の修行をするのではなく、同志と僧伽を組んで精進するようにである。袁易にあっては、芸術は、作品のみならず、それをとりまく交友関係やパフォーマンスも含めたものであった。これも後の文人楊維楨に相通ずるものがある。『詩集』の「湯彌昌序」にいう。

「憶う昔、通甫恙が無かりし時、余と三日として晤語せざるは無し。否らずんば則ち奚奴を走らせて詩筒を遞す」

「詩筒」のことは、先に引用した陸文圭の序にもあった。同時代人に有名な事柄であったのだろう。また「城」に関して引用した詩においても、何か興のおもむくことがあれば、城中の諸友と唱和したがるひたむきさが見てとれる。

「敢えて王吉を追うを望まんや、寧ぞ禰衡を薦むるを希まんや。湖山奇句有らば、倘しくは許せ柴荊に寄するを」（巻一「湯師言の杭に赴くを送る」）

自らの官位などはどうでもよいから、まず杭州の風物を詠んだ詩を送ってくれとねがう。先に引いた「潘鶴臞の帰りて母に侍うるを送る」（巻一）の末句にも、

「閑居詞藻富まば、札翰時に相貽れ」

と、詩作をよこすように念を押す。

袁易は自作を後世に残すことにあまり頓着しなかったようで、「湯彌昌序」にも彼の遺稿が「散落すること少なからず」であることが述べられてあり、友人達の手元に残された応酬の作を集めて今のテキストが出来たらしい。「湯序」にいう。「詩章楽府、余之を得ること最も多し。是に至りて仲長（袁泰）に投ずること数十篇、而して集始めて粗ぼ備われり」『詩集』に応酬の作が多いのはこのためであろうが、それはまたはしなくも袁易が自らの芸術を確立するに際して、人間関係の中にそれをはぐくむことを重視したことを示す。

「浙東の山色は江を渡りて青し、眼底の新詩は此に向いて成る」（巻二「湖上即事月心を懐うの辞多し、六首」第二首）

「濁酒悠然として酌む、新詩此に向いて成る」（巻四「小山の夏夜独坐に和す」第七首）

「新詩向此成」が無造作にくりかえされているが、このように佳詩を思いついたら、すぐにでも友人に知らせたがる彼の心のときめきを見よ。「小山の夏夜独坐に和す」第九首のごとく「歌長くして聊か自ら舞い、詩好きも誰に聴かしめんと欲す」という孤独な状態では彼の力は発揮できなかったのであった。

後世においては、文人達が徒党を組み、よきにつけ、あしきにつけ、政治性を発揮する場合が多いが、その起源を求めれば、袁易の場合のごとく、都市から距離をおき、志しを同じくして芸術を追求するグループこそが初期の純粋な形だったのではないかと筆者は考えている。

歴代、南宋末元初の詩人のそれぞれについて、前代のどの作者を祖とし、何派につらなるかという議論がかまびすしい。袁易についてもそうである。今その議論の一つ一つを取り上げないで、『元代文学史』の四二九頁から四三〇頁の叙述を引用することによって、歴代の議論を総括したい。

「袁易也た詩名有り、他の朋友龔璛は他を將て比して王安石と作す。清代の宋詩を宗とする厲鶚却って又他を把りて比して黄庭堅、陳師道と作す。四庫館臣は則ち認めて袁易の詩は王安石の詩と相い類せず、黄庭堅、陳師道の詩とも也た是れ門径各の別なりと為し、『提要』は認めて陳与義と近きと為すと為すは、未だ尽くは然らじ。大致説き来れば、袁易の詩歌は詩句明浄と音調響亮との特点を具有す、同時に較や典を用いること少なし。清代『元詩別裁集』は袁易の七律三首を選ぶ。……編者は是れ唐音の標準より着眼せり。袁易の詩作を翻検するに、応当に這の三首の詩は確かに是れ他の佳品なりと説くべし、此に於いて也た袁易の詩作は江西詩派と区別する所有るを見る可し、也た四霊、江湖派とも縁り無し、其の厲鶚の象く那の様に袁易の作品を把りて生拉硬扯黄、陳の後塵と為すよりは、無寧ろ説くべし、他は他の朋友戴表元、趙孟頫と相い似て、江西派を撇開し、而して直ちに唐詩を以て宗と為すと」

文学史的立場からすれば、細部はともかく、妥当な総括といえよう。特に最後の戴表元、趙孟頫同様南宋詩壇をおおった江西派から離れ、唐詩を宗としたというのは賛成である。しかし、ここまでの筆者の立論からすれば、そのことは重大事ではない。それでは「新詩此に向いて成る」と叫んだ袁易の喜びをとらえそこなってしまう。ここでは誰に似ているかという論争ではなく、何が新しいのか、もしくは新しいと感じられたのかということこそ探求すべきではないか。筆者は彼の詩に文人性の萌芽を見た。元代の詩人を論ずる時は、文学史的なあまりに高所に立った見方ではなく、身を当時の状況の中においた地をはうような視線が有効だと思う。またいいかえれば、残された作品だけを見て大局的に他と比べて模倣とみなす静的な見方ではなく、たとえ作品が前代とそっくりのものしか出来上がらなくても、その裏にある作者の目ざしたものを、実をむすばなかったにせよ、作者のもった潜在力を、探求する動的な見方をこそ筆者は採用したい。

このような立場からは、同時代の評が最も参考になる。まず、『詩集』「龔璛序」。なお龔璛は『元代文学史』のい

うごとく、袁易詩が王安石詩を模倣しているといっているのではない。

「予は今人の詩を読むに、其の今人為るを知らざる者は、唯だ吾が通甫に於いて然りと為す。通甫没して十餘年なり矣。意なる者は亦た古えにして猶お今なり。今斯の人豈に得易き哉。世の詩を為す者は古人を学べば其の似たらんを欲し、己意を出だせば其の新しきを欲す、両端ある而已。然れども似る者は多く踏襲し、新しき者は常に崖異たり。唯だ似て似るに非ざる也。新たにして新たに非ざる也。之を渾然に得て、又未だ古人、己意、孰れが先か孰れが後か知らざる也、始めて詩を言う可き耳」

今古渾然たるが大事だという。古えを踏襲するのが常である中国であるから、むしろ、今、新の強調がここでは特異である。

「一つには、士科挙の業慮を去りて、詩を為らざるは無し。北音は壮に傷い、南音は之を浮に失す。書文大同すれば、宜しく古えに極まるべし」

元による科挙の廃止で、詩は芸術本来の自由をとり戻した。そして元による中国統一はまさに昔の大同の世の復活であるから、古えに戻るべきである。ここで注意したいのは、「古え」がむしろ南宋以来の今の江南を否定するもので、新たなる今というべきものであるということである。

そして、袁易の文学は、その新たなる方向への改革を実践した。龔璛は、袁易をこう評価する。

「古人の嘗て有りし所の者皆有り、今人の当に無かるべき者必ず無し」

この評を古典模倣と単純に見なしてはならない。今を否定する新たなる者の息吹がそこにある。

郭麟孫の序にいう。

「窃かに以為えらく詩は性情の正に本原し、其の物に遇いて懐を興し、時に因りて事に感ずるに当りて、之を詩に形わす。初めより何ぞ嘗て拘拘然として筆を執りて学びて此くの如くすと為せば則ち某人に似たりとて、然る後に詩を為らん哉」

詩は性情に基くもの、古人の誰それをまねようとあくせくして作る者ではない。

「蓋し其の蓄する所既に深ければ、上は三百篇自り以て魏晋唐宋諸家の詩に至るまで、胸中に融解せざるは莫し」

かといって、詩は勝手に作ればよいというのではなく、学問の根底がなければならない。古えの詩を学ばねばならない。しかしそこで模倣ということが問題となる。

「故に其の篇章を作為するや、自ら似るを期せずして、之に似たる者有る耳」

無論、それは表面上の類似であって、我々は内面の運動を見なくてはならない。

「然りと雖も似るは特だ其の形体のみ也。妙にして之を化するの地に至りては、又古人の語意の表に超出する者有り、尤も未だ識るに易からざる也」

ここにおいて、郭の考えは筆者の考えに一致する。袁易の生きた時代から唐詩模倣の風潮がはじまるが、作者達の中には新たなる者を作ろうという熱情がたぎっていたのである。その熱情は各方面に向かうであろうが、その一つが本稿で強調した文人性をもつ作品及び生き方なのである。